

「わたし」考

山 本 典 子

I. はじめに

筆者はカウンセラーとして、クライアントが「わたし」に出会い、向き合う現場に立ち会う経験を重ねている。その中で、筆者自身が新しい「わたし」に出会い、魂の根底から揺さぶられるような事例に出会うことも少なくない。その中でも、本稿執筆の直接のきっかけとなったのは、家族に腎臓を提供した後、「あの人はあの人、わたしはわたし。(中略)元は他人やし、死ぬときも別やし」と語った生体腎移植のドナーAさんとの出会いである。かけがえのない家族の生命を救うために、自らのかけがえのない身体の一部を提供するという体験を経た後に、改めて他の誰とも「別」である「わたし」に向き合ったというAさんの語りの中に、人間の成長のひとつのヒントが表されているように感じた。Aさんの体験、語りの詳細については後述する。

人が自分自身に向き合うこと、アイデンティティの問題などについては、洋の東西を問わず、また、太古の昔から様々に、既に語り尽くされている感もあるが、本稿では、筆者がカウンセリングという臨床の場で出会ってきたAさんをはじめとする様々な「わたし」について、考察を展開したい。

II. 「わたし」の発見

人はみな、「わたし」という一人称で表される人物が主人公である人生を生きている。

ある一人の人物にとって「わたし」は他の誰でもない、その人物本人のみであり、その他の人は、「あなた」、「あなたがた」、「彼」、「彼女」、「彼ら」、「彼女ら」といった二人称、あるいは、三人称で表される存在である。「わたし」を含む集合体を「われわれ」、「わたしたち」といった一人称複数形のことばで

表すこともあるが、「われわれ」の中でも、「わたし」以外の人物のひとりひとは、「わたし」にとっては、「あなた」、「彼」、「彼女」である。また、「わたし」にとって、「あなた」、「彼」、「彼女」である人物は、その人物本人にとっては、「わたし」という一人称を生きる人物である。

人間の社会は「わたし」の集合体である。それぞれの「わたし」が「あなた」や「彼」、「彼ら」などと関わりながら、社会生活を営んでいる。

これらのことは、当たり前のことであるとも言えるが、誰もがいつもそのことを意識しているわけではないし、意識の仕方にも個人差があると考えられる。

河合隼雄は、小学6年生の国語の教科書のために書き下ろしたエッセイの中で、自身の10歳か11歳の頃の『『わたしの発見』の体験』について、「それまでは、群れの中に交じって、あるいは、母や友人のかけにかくれて見えなかった『わたし』を、わたしは、はっと、『あっ、わたしという人間がこの世に一人いるのだ。』というような感じで、見付け出したのである。それは、なんとも不思議な体験であった。…(中略)…今まで、家族や仲間などの中に入りこんで、みんなとともに生きていたのに、急に『わたし』という人間がこの世にいるということが、ほかからはなれてくっきりと見えてくるのである」と描写している(河合2002b p.42)。

また、アイデンティティの獲得、「わたしとは何者か」という問いといった「わたし」体験は、青年期の課題として考えられることが多いが、河合は、「わたし」という「かけがえのない存在」の発見を、もう少し早く、10歳ぐらいの年齢でする子どもが多いことを指摘し、その根拠の一つとして、多くの児童文学の主人公の年齢が「10歳くらい」に設定されていることを示している(河合2002a p.86)。河合は、今江祥智著『ぼんぼん』(理論社)の主人公である10歳の少年、洋と、カニグズバーグ著『クローディアの秘密』(岩波書店)の主人公である11歳の少女、クローディアを、「10歳くらい」で「わたし」体験をする例として示し(河合2002a pp.86-87)、『『わたし』を大切に思うと、それまでは当たり前のように感じていた、『わたし』に対するほかの人々の心

づかいなどが、前よりよく分かるようになってくる。(中略)『わたし』を大切にし、『わたし』とはいっただれで、どんなことをするのだろうなどと考えているうちに、それを通じて、『わたし』を取り巻く多くのものに対して、わたしの心が開かれ、それらを大切にしたいと思うようになるのである」と結論づけている(河合 2002b p.45)。

もっと低年齢でも、「わたし」に出会う機会はあるように思う。筆者が2歳になる2ヵ月ほど前、つまり、1歳10ヵ月のときに妹が生まれた。その日、父に連れられてうきうきと病院に、母と新生児である妹を初めて見舞いに行った筆者が、急に眉をひそめて、父に「あれは誰のママ？ 赤ちゃんのママ？ ノコ(筆者の幼少時の自称)のママ？」と問うたそうである。父が「両方のママだよ」と答えても、筆者は納得がいかない様子で押し黙り、母からの言葉がけにも答えず、持参したプリンを難しい顔をしたままだ黙々と食べ、家まで殆ど無言で帰ったという逸話(?)を、大人になるまで繰り返し聞かされ、笑われた。その時の自分の気持ちをはっきり覚えているわけではないが、家族から聞いたその頃の筆者の様子から察するに、筆者は妹が生まれることを聞かされ、それを楽しみにしていた。しかし、いざ病院で、これまで独り占めしていた母の横に、見たこともない赤ん坊が寝ているのを見て、自分の拠り所を失ってしまったかのような、或いは、自分の一部を失ってしまったかのような不安を抱いたのではなからうか。「わたしとは誰か」「わたしとは何者か」といった明らかな疑問にはならないが、それでも、その年齢なりに「わたし」に向き合う一歩としての体験であったと考えることができる。家族にとっては、小さな子どもが難しい顔をして黙々とプリンを食べる笑い話であるが、その小さな子どもであった筆者にとっては、急に降って湧いたかのような「わたし」との初めての出会いの渦中であっては、それが精一杯の行動であったのかもしれない。

同じような体験をした人は多数いるだろうと思うし、幼いながらも、予期せず「わたし」を発見する機会には他にも様々あろう。

その後、これまで多くの先達が論じているように、多くの人が、家族、友人、社会といった「われわれ」、「わたしたち」の世界の中で幾多の経験を経

て、青年期に、本格的なアイデンティティの確立に向けて、「わたし」との出会いを繰り返し、思い悩み、立ち止まったり、混乱したりしながらも、やがて、唯一無二の「わたし」像を引き受け、また、それに肉付けをしていき、大人として歩み出していくものと考えられる。青年期には、人は「わたしとは何者であるのか」という深刻な葛藤と危機に直面し、その中で、自立に向けてさまざまな役割を果たしながら、自分でよく考え、納得した上で、自らのアイデンティティを確立していくことが課せられているともいえる。

しかし、そこで一旦アイデンティティの確立という課題をクリアしたとしても、それで終わりということはない。大人になっても、人間の心は常に変化を続けているし、その後、経験する様々なライフイベントなどによって、それまでと違った立場、違った状況に立つことになり、青年期に獲得したはずのアイデンティティでは、自分を支えきれなくなって、改めて「わたし」についての問い直しが必要になる場合が多々ある。あるいは、青年期に、それまで依存していた親、家庭、学校といった「わたしたち」の世界から自立し、一旦「わたし」という主人公がクローズアップされた世界を経験しながらも、今度は次第に次世代を育成するための家庭、会社、社会といった「わたしたち」の世界に埋没し、いつしか「わたし」という主人公の存在が薄れてしまっていたところに、いきなり「わたし」への問い直しが改めてつきつけられるような出来事に直面することもある。

次章では、生体腎移植のドナーであるAさんの語りをもとに、「わたし」に関する考察を深めたい。

III. 「わたし」の再発見 —生体腎移植のドナー、Aさんの場合—

筆者は、生体腎移植の患者およびその家族の心理的な援助体制の構築を目的として、関係者（ドナー、レシピエント、ノンドナー（ドナー、レシピエント以外の家族）、移植医療に関わる医療関係者など）にインタビュー調査を行っている。その調査の過程で、先述の生体腎移植のドナーAさんとの出会いがあり、移植後約5か月の時点で、移植にまつわるAさんの体験について話をき

いた。なお、Aさんからは、研究目的での情報の公開について了承を得ているが、プライバシー保護のために、事実の一部に改変を加えている。

事例中、「」内はAさんの発言、『』内はその他の人物の発言を示す。

1. Aさんについて

70代前半の女性。無職（元、自営業）。インタビューの約5か月前に長男（移植当時40代後半、無職）に腎提供。夫（70代前半）と二人暮らし。長男、長女（40代後半）、次男（40代後半）の3人の子どもがおり、それぞれ結婚して、Aさん夫妻とは別居している。長男の家族は、妻（40代後半）と4人の子ども（10代前半から20代前半）である。

2. Aさんの語り①（Aさんの人生とAさんの家族について）

Aさんは、結婚後、夫とともに自営業をきりもりしつつ、子育てにも励んだ。しかし、商売や子どものことなどに「全然関係なしで遊び歩く」夫と離婚しようと、若い頃から何度も考えてきた。いろいろ悩んだ末、「わたし、改革しました、自分で。あの人（夫）はあの人、わたしはわたしで。（中略）元は他人やし、死ぬ時も別やっしていうことで、70過ぎて、こんなこと（腎提供）を経験して、そんな感覚になりました」との言葉で、Aさんは腎提供にいたるまでの人生や家族に関して語り始めた。

Aさんと夫との間のみならず、Aさんの家族の中には様々な問題や葛藤がある。長女と次男は「しっかりしている」が、長男は「力がない」。夫は長女と次男とは「結びつきが強い」が、長男とは、「いじめるわけやないけど、あんまり合わへん。そないなってきたら、わたしが勝手にこれ（長男）がかわいなりますね」。そんな中、「序列」を作らないと家の中に「おさまりがつかない」ので、子どもたちには、夫、Aさん、長男、長女、次男という年齢順の「序列」をつくり、「お父さんが偉いと言ってきかせている」。また、3人の子どもたちそれぞれに家を買ってやるなど、平等に接するようになってきたが、「うまくはいかない」。

長男は「勉強が好きではなく」、大学に行かずに、Aさん夫妻が店を約5年前にたたむまで、家業を手伝っていた。現在は、Aさんは長男が生活費を無心してくるたびにお金を渡して長男一家を「養って」いる。次男は大学を出て企業に就職したが、給料を実家に入れたことはない。次男は自分が家業を継ぎたかったと思っている。3人の子どもたちは、小さい頃は喧嘩もしない「仲の良いきょうだい」だったが、5年ほど前に長男の腎不全が発覚してからは、長女と次男の「二人が組んで、『(Aさんが長男に) お金をやるから働かへんのや。お金をやらんと放っいたら透析して働くやろ』と言い出した」。Aさんは長男には、「しっかりしないとおさまりがつかないといい聞かせてるけど、大きすんのが下手やったかな。移植後も、働きに行こうとしない長男にAさんはまとまったお金を渡し、Aさん自身の趣味のひとつであるインターネットでの「株に熱中させた」。長男は「働く段取り」としてパソコンを習いに行き始め、株ではまだ「負けてばかり」で、それで稼ぐには至っていないが、「あれで気が紛れてると思います」とAさんは語る。

3. Aさんの語り② (腎提供に至るまで)

約5年前、長男が病院で腎不全との診断をうけ、即入院となった。長男の入院中に商売の継続が困難となり、店を閉めた。長男の妻は「煙草は吸う、お酒は飲む、朝寝坊するという不摂生」な生活を続けている。Aさんの家では、これまで「規則正しい」生活をし、誰も病気をしたことがないので、Aさんが長男の病気は「不摂生やったからと違う？」と言うと、「向こうの親」が『不摂生から腎臓が悪くなることはない』と言ってきた。

長男が透析を嫌がり、透析をせずに、当時かかっていたB病院には内緒で4年余漢方薬を飲んでいたが、病状は進行し、B病院から移植を行っているC病院を紹介された。夫は『40いくつもなってるやつ、一人で行かせろ』と言ったが、Aさんが「もう、命放ってでもええから、わたし、行くからね」と言うと、夫も「ついてきた」。お金のことでもめている長女や次男には相談しなかった。夫とAさんの二人がドナーとなるための検査を受けたところ、マッチ

ングは夫の方がよかったが、夫は身体に不調がみつきり、ドナーはAさんに決定した。夫が人に『わしはやろうと思うとったけど、身体があかんかったから』と「うまいこと」言うのが腹立たしいとのこと。

移植に一番積極的だったのは長男。しかし、Aさんも「わたしも強情やから、やるって言うたら、どうしようかという気はなかったです。(中略) 子どもの先に死なれたらかないません」。自身が高齢であることが少し気になったが、「ごっつい自信」のあるC病院の医師に『100まで生きられる腎臓の持ち主やから、あげられる』と言われた。「子どものためやったらしょうがないわね。自分が生んでんから」。医師からは、手術の翌日には立って歩けると聞いていたので、「お産と一緒に」で翌日には帰れるかのような「簡単な気持ち」での決断であった。

4. Aさんの語り③ (移植に際して)

移植はC病院で行った。途中で麻酔がきれて、「ものすごい痛い思い」をした。2日ほどはかなり苦しかったが、痛み止めなどの対応で、病院は「よくしてくれた」と思う。しかし、「麻酔と薬のせいでノイローゼ」になり、「夜通し、幻覚」が見えた。しかし、腎提供に関して、ドナーに精神的なケアが必要だとは特に思わない、とのこと。

5. Aさんの語り④ (移植を終えて)

腎提供の結果を10点満点で表すとすれば「9点」。「自分の責任を果たしたような気がしてよかったと思う」。腎提供をして「よくなかったこと」は何もないが、長男が移植後3度も入院して検査をしており、心配である。「わたしがちょっとぐらい寿命が縮んでもしょうがないって思ってます。何も失うてません。自分にあるもんをやるだけやから。(中略) やっぱり自分が大丈夫かなと思うくらいかな。命をはっきりしながら、それぐらい(笑)」。

人から、『あんた、偉かったね』などと言われるが、「あんたかて、自分の子どもが腎臓(マ)になったらそないなるわ、と思うぐらい」。しかし、『盲腸を

切るようなものらしいね』と言われたときには、「ちょっと待ってよ。それよりはきついわ」と言い返した。

腎提供前後で、Aさん自身は「あまり変わりませんが。何かにいっぱい追われてるからやろ。カラオケも練習せなあかんし、そない言うてる間に、今日は陶芸教室やったし・・・」。今のAさんの心配、不安は、長男のこのことのみ。「自分は自分の身体やから。(中略)もうトシやから、好きなことして死のうと思って、もう、好きなことばっかりしてますねん」。

移植後、長男との関係は「やっぱり親しなりますな。(中略)かわいなりますな」。移植前は孫(長男の子ども)のことなどに口だしするとうるさがられ、長男はお金をもらいにくるばかりで、不足しか言わなかった。Aさんの腎提供に対しても長男は「感謝の気持ちはないん違う?」と思う。しかし、移植後、長男は『掃除のおばちゃんがおかあちゃんに感謝せなあかんでって言うてた』と「人の口を借りて」一度だけ感謝の気持ちをAさんに表した。

他の家族との関係は移植前と変化はない。

今までの人生の中で、腎提供は「あんまりこたえてません。(中略)死ななところと思っても、順番がまわってきたら死ななしゃないことがありますから」。

「わたしは、ものすごい前向きですやろ。がめついですねん。一生懸命ね、前向きでね」。これから、漢字検定に挑戦する予定にしている。「まだまだ、これから、これから」と笑顔を見せた。

6. Aさんの「わたし」との出会いについての考察

Aさんは年齢が現在70代前半ということなので、前章で論じたような、「わたし」との初めての出会いや、青年期特有のアイデンティティ確立のための葛藤などは、おそらく数十年前に経験済みのことと考えられる。しかし、今回のAさんの語りの中では、その後、Aさんがさまざまな事象を通して「わたし」自身に向き合ってきた、或いは、向き合わざるをえなかった経験についてが、繰り返し、Aさん独特の明るい「前向きな」論調で述べられていた。

Aさんの家族には、今回のAさんの腎提供に直接結びつくような事象が起きるずっと以前から、Aさん vs. 夫、長男 vs. 長女と次男、Aさん vs. 長男の妻の実家など、かなり表面化していると思われる対立関係、葛藤が複数、交錯して存在している。その中で、Aさんは、「序列」を作らなければ家の中が「おさまりがつかない」として、ばらばらになりそうになる家族を束ねる要のような役割を果たしているようである。

若い頃から商売や子どものことに「全然関係なしで遊び歩く」夫との離婚を何度も考えながらも、実際に家の切り盛りをしてきたのはAさんで、子どもたちは相続の不服やお金の無心をAさんに言ってくる。それに対し、Aさんは「序列」を重視する形で夫をたててはいるが、本当の意味で夫を「偉い」と思っているわけではない様子が、遊び歩いて一家の長としての役割を果たさぬ夫、腎提供を逃れつつも「うまいこと言って」体裁を繕う夫を語ることばの端々に感じられる。

長男の腎不全の発覚をきっかけに家族内の対立関係が一層表面化した。財産問題をめぐって長男を攻撃していた長女と次男に夫が加勢すると、Aさんは「力がない」長男が「勝手にかわいく」なり、家の中が二派にわかれる対立構造ができ、険悪な空気が漂う。しかし、Aさんはその空気に流されたり、押しつぶされたりすることなく、「前向きに」、Aさん自身の言葉でいうと、ある意味「がめつく」、「強情に」、自分自身に向き合うことによって、何を優先し、何を切り捨てていくかといった「序列」を作って「わたし」を保つことができたのではなかろうか。

長男の腎不全という病に際し、移植という治療法の選択に一番積極的だったのは長男であったとはしながらも、Aさんは、「子どものためやったらしょうがないわね。自分が生んでんから」、「何も失うてませんで。自分にあるもんをやるだけやから」と腎提供を決意した。このAさんの自己犠牲には、長男の健康を取り戻すという一番の目的のほか、一家で一番「力がない」長男を助けなければならないというAさんの一家の要としての責任感も働いたかもしれない。「序列」を重視するAさんとしては、子どもが先に死ぬことは順番が

乱れることであり、親が子どもの犠牲になることは、ある意味、自然なことと思える部分も大きかったとも考えられる。また、普段から家庭を顧みず、長男の危機に瀕しても病院に『ひとりで行かせろ』などと言い、結果的に腎提供を上手に逃げた形となった夫や、「不摂生」な生活態度で長男を病気にした（とAさんが思っている）長男の妻、お金のことで長男を責め、お金をやらずに透析して働かせろなどと言いつつ長女と次男、ともすれば、いつまでも自立せず、お金のみならず腎臓まで要求する長男をも含めた周囲の人々への対抗意識などの存在も推測される。そしてその対抗意識は、それらの人々とは違う、AさんのAさんたる「わたし」像を対照的にくっきりと浮かび上がらせるものとして機能したとも推測できる。老廃物の排泄や体液のバランス調整がうまくいかない腎不全のような状態を呈している家族の中であって、この家族全体の“罪”をAさんが負うことで、家族のバランスが保たれているかのようなのである。

Aさんは、医師から移植の次の日には立てるときに「お産と一緒に」のように手術の翌日には帰れるような「簡単な気持ち」で決意したと語るが、実際は途中で麻酔がきれ、「ものすごい痛い思い」をしたり、「ノイローゼ」のような状態になって「幻覚」をみるなど、思った以上に大変なこともあったが、全体としては「あんまりこたえてません」ということが強調された。しかし、マッチング上は夫の腎臓の方が提供に向いていたことをあかしたり、人に『盲腸を切るよう（に簡単）なものらしいね』と言われたときに、「ちょっと待ってよ。それよりはきつい」と言い返すなど、前面に出ているヒロイズムとは少し違う不満ももらされている。Aさん自身が言うように、本音と建前を使い分けることなく、「まっすぐ言いたいこと言って」いるために、気持ちのやり場をなくしてしまわずに、様々な葛藤を乗り切っていくことができているといえるのではなかろうか。

Aさんは腎提供の結果について10点満点中9点と評価している。まだ検査を受け続けている長男の状態への心配がマイナスポイントとなっており、他の点については満足な結果で、「自分の責任を果たしたような気がしてよかったなと思う」とのこと。一度だけ「人の口を借りて」感謝の意を表現した長男か

らはあまり感謝されていないというのがAさんの実感のようではあるが、長男との関係性が移植を通じてより親しくなったというAさんには、やはり感謝してもらいたいという気持ちがないわけではない。しかし、Aさんの満足感、長男の態度や感謝の気持ちに左右されるというよりは、Aさんが「わたし」に向き合い、「わたし」の「責任を果たせた」という実感に基づく部分が大きいことが推測できる。

また、Aさんが移植を「お産」に重ねて考えている点は、Aさんが、無意識のうちに、移植を長男の生みなおしのようにとらえていることを連想させる。Aさんが自身のかけがえのない腎臓を提供することによって、長男は新しい生命を得ることになり、また、Aさん自身も、腎臓がひとつ無い状態の新しい「わたし」になったといえる。「大きすんのが下手やったかな」とも表現する子育てを、ここで一旦リセットしたという点で、移植によって、Aさんが「責任を果たせた」と言える結果がもたらされたともとらえられる。

そういったことが、インタビューの中で出てきた「わたし、改革しました、自分で。あの人はあの人、わたしはわたしで。(中略)元は他人やし、死ぬ時も別やしっていうことで、70過ぎて、こんなこと(腎提供)を経験して、そんな感覚になりました」というAさんの言葉に集約されているように感じる。この発言における「あの人」は、直接的には夫を指して言われたものであるが、Aさんの気持ちの中では、おそらくAさんの周囲の、「わたし」以外の全員を含むものと考えてもよかろう。様々な葛藤を乗り越え、自分の身体の一部を提供するという大仕事までやり遂げ、更に長男には「働く段取り」をつけることまでしたということで、ようやく「自分の責任を果たした」、「改革しました」と言える、新しい「わたし」の境地に至ったということなのであろう。

Aさんはインタビューの最後に「わたしは、ものすごい前向きですやろ。がめついですねん。一生懸命ね、前向きでね」と自ら語った。Aさんの腎提供の体験、それまでの人生には多くの喪失の体験もあったことと察せられるが、それらをひとつずつ悲哀の作業などをおして解決していったという感はあまりない。かといって、喪失体験を封じ込め、心の苦痛を回避しているともいえ

ない。Aさん自身の言葉を借りていうなら、「ものすごい前向き」に「がめつ」く、「わたしはわたし」の道を貫くことで、喪失体験をもクリアしていくというAさんの生き方をみることができるよう思う。

夫との離婚を考える中で、Aさんが「自分で」「改革」を行い、「わたし」として生きる道を切り開いたのと同じように、Aさんの腎提供の決断は、Aさんにとって、死という有限を自らの中に引き受けながらも、Aさん自身が自らの意思で腎不全のような症状を呈している家族から離脱し、「わたし」としての新たな生を選択するものであったと考えられる。

IV. まとめ

上述のAさん以外にも、生体腎移植を経験した多くのドナーやレシピエントから、新しい「わたし」との出会いについて、様々なかたちで語られている。以下に数例を挙げる。

たとえば、母親から腎提供をうけた30代後半の男性Dさんは、「俺は俺の道に、自分で答えを見つけなきゃな」と語り、「みんなが踏み分けた道」とは違う道を歩いている「俺」への気付きや自覚が示唆されている（山本 2016）。

また、長女に腎提供をした50代後半の女性Eさんにバウムテストを実施した際、Eさんは紙の真ん中に実をたわわにつけた「巨木」を描き、「まわりにいろんな大きさの同じ種類の木があるけれど、他の木はどうあろうとも、この木は上へ上へと伸びていきます」と語った。描かれた「巨木」がEさん自身をあらわすものだとすると、周囲に理解しあえる人（「同じ種類の木」）はいるけれど、その存在とは別の、他ならぬ「わたし」への意識の芽生えが感じられる。

生体腎移植は原則的には家族（正確にいうならば、6親等内の血族、配偶者、3親等内の姻族）というかなり親密な関係性を持つ人間関係の中で行われる行為である。親密であるがゆえに、特別で複雑な感情や葛藤に満ちた関係性の中で、生命にも関わる臓器という臓器の授受を巡る様々なやりとりが、幾重にも重なり、様々な方向性をもってなされるものと考えられる（山本 2018）。そ

のような状況下で、当事者たちの、「われわれ」たる家族への様々な思いが錯綜するのと同時に、やはり、それぞれの、他ならぬ「わたし」の存在への新たな気づきが促進されることは想像に難くない。そして、家族のそれぞれがそれぞれの「わたし」に向き合い、受け入れることで、生体腎移植を、与えられた試練を乗り越え、よりよく生きるための経験として位置づけることができるものと考えられる。

人が「わたし」に向き合うのは、当然のことながら、生体腎移植のような生命の瀬戸際にかかわるような特殊な体験のときのみではない。

熾烈な受験戦争を勝ち抜き、難関大学に入学した学生が、ふと、「わたしは何のためにこの大学を選んだのだろうか」、「ここで学ぶことが、わたしにどのように役立つのだろうか」といった疑問に苛まれることもある。

友人関係にトラブルが生じ、孤立してしまった高校生が、「わたしは友だちから必要とされていない存在なんだろうか」、「わたしの何がいけなかったのか」という問いに押しつぶされそうになって、学校に来づらくなってしまいうこともある。

定年退職で数十年に及ぶ会社員人生に幕を下ろした人が、憧れていたはずの自由な時間を前にして、「わたしが今までやってきたことは、一体何だったのだろうか」、「これからわたしは何をすべきなのだろうか」、「これからのわたしにとって生きがいとは何だろう」といった疑問に戸惑ってしまう、というのもよく聞く話である。

これらのような人生の岐路に立ったとき、或いは、新境地に至ったとき、「わたし」に向き合うことは必要なことではあるが、時として非情な現実や、受け入れがたい現実に向き合わなければならないこともある。場合によっては、あえて「わたし」を問うことを自らに課さず、家族や友人、学校、会社といった自らを包み込む「われわれ」というあたたかい集合体の中で、安んじることが必要な場合もあろう。特に、急に理不尽ともいえるような運命に苛まれた時、或いは、自分の決断に迷いが生じた時など、自分に自信がもてなくなってしまうと、人は他者からの承認や評価を欲したり、一般的な価値観や道徳

観、既存の概念との一体感を求めたりしがちである（山本 2011）。「わたし」への思いを封印し、ただ時の流れに身を任せるような生き方でしか、人生の荒波を乗り越えたいと感じることもあるだろう。

しかし、実はそのような時こそ、人はそれぞれの「わたし」に向き合うチャンスであるともいえる。「わたし」は成長し続けるものであり、また、「わたし」をとりまく環境も常に変化し、それに呼応して「わたし」も変化する。しかし、日常の生活の中では、「わたし」の成長や変化に自分では気づけないことが多い。それに対し、非日常の出来事を前に、ふと立ち止まったときに、「わたし」の断片が姿を現すことがある。

人が「わたし」の全貌をなかなか掴みきれない場合や、ひとりで直視することが困難な場合に、その援助が得られる場がカウンセリングなのではないかと筆者は考えている。カウンセリングは、クライアントがカウンセラーと信頼関係を築き、その安心感、安全感の中で、「わたし」に向き合っていく共同作業である。その人独自の「わたし」像は、あくまで本人が出会い、確信していくものであり、決してカウンセラーが教え導いたり、指し示したり、こうあるべきと矯正したりするものではない。カウンセリングの中では、本人が「わたし」についてカウンセラーと共に考え、言葉やその他の表現法で語るうちに、その姿形が自身の中で露わになっていき、更にそこに肉付けをし、次なるステップに備えて更に成長することが一つの目標となる。

前出の生体腎移植のドナーのAさんとEさん、レシピエントのDさんは、それぞれ臓器移植という経験をひとつの転機として、新たなるライフステージに進んだ人たちである。それぞれが自らの体験に既になんらかの答えを見出し、納得した上でインタビューに臨んでいる感はあったが、それぞれの「あの人はあの人、わたしはわたし」、「他の木はどうあろうとも、この木は上へ上へと伸びていきます」、「俺は俺の道に、自分で答えを見つけなきゃな」といった言葉は、自らの体験を語る作業の中で、「わたし」像がはっきりと形をもって表出されたものと考えられる。

多くのクライアントの「わたし」に出会ううちに、カウンセラーである筆者

の「わたし」は揺さぶられ、様々な変化をとげつつある。カウンセラーとしての「わたし」の揺らぎを受けいれつつ、しかし、クライアントの「わたし」に真摯に向き合える存在であるべく、「わたし」への意識を更に深めていく必要性を感じている。

V. 参考文献

- Jung, C.G. 1939. “Bewusstsein, Unbewusstes und Individuation” , Zentralblatt für Psychotherapie und ihre Grenzgebiete, XI-5, pp.257-270. 林 道義訳「意識, 無意識, および個性化」『個性化とマンダラ』みすず書房 1991, pp.49-70
- 亀井勝一郎. 1971.『思想の花びら もの思う人のために』大和書房
- 神谷美恵子. 2014.『人間をみつめて』河出書房新社
- 河合隼雄. 2002a.『『わたし』体験』樺島忠夫、宮地裕、渡辺実監修『光村ライブラリー第 17 巻 「わたし」とはだれか』ほか』光村図書出版 pp.83-89
- 河合隼雄. 2002b.『『わたし』とはだれか』樺島忠夫、宮地裕、渡辺実監修『光村ライブラリー第 17 巻 「わたし」とはだれか』ほか』光村図書出版 pp.39-45
- 山本典子. 2011.「生体腎移植のドナーに関する臨床心理学的考察 — C.G.Jung 『ヨブへの答え』をとおして—」『Humanitas』 Vol.36, pp.23-33
- 山本典子. 2016.『『生きる』ことに関する一考察』『Humanitas』 Vol.41, pp.23-37
- 山本典子. 2017.「人生の転機について」『Humanitas』 Vol.42, pp.21-39
- 山本典子. 2018.「生命の選択肢に関する一考察」『Humanitas』 Vol.43, pp.37-52
- 付記：関係者のプライバシー保護の観点から、本稿中の事例の引用は差し控えてください。